

田中優子先生のご退職に寄せて

島本, 美保子

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

67

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2021-03

田中優子先生のご退職に寄せて

社会学部長 島 本 美保子

このたび社会学部教授であり、そして第19代法政大学総長である田中優子先生がご退職になります。田中優子先生をかつて「法政の宝」と呼んだ社会学部の教員がおりました。法政大学生え抜きの著名人として法政大学を、スポーツ系の六大学から品格あるリベラルな有名大学へと、そのブランドをパワーアップさせた功績は素晴らしい一言に尽きます。法政大学文学部日本文学科をご卒業され、1980年から法政大学第一教養部専任講師、同学部助教授、同学部教授、2003年より法政大学社会学部教授、2012年には社会学部長、そして学部長の任期満了後時をおかず、2014年より法政大学総長とされました。

ご専門は近世文学であり、芸術選奨文部科学大臣賞受賞、サントリー学芸賞を受賞された『江戸百夢』（朝日新聞社、ちくま文庫、2010年）をはじめ、数多くの著作を世に送られてきました。また単に江戸文化の専門家というだけでなく、TBSの報道番組「サンデーモーニング」でコメンテーターとして長年ご出演され、『週刊金曜日』の編集委員を務められるなど、日本を代表する社会派の論客としても活躍されています。

ご専門について語る知識はありませんので、社会学部教授田中優子先生への社会学部の後輩教員からはなむけの言葉を以下で述べたいと思います。優子先生が「社会学部の教員」として過ごされたのは、10年余りという案外短い期間でした。私が優子先生の振る舞いについて最も感動したのは、指導学生が火気使用を認められていない場所で花火をしたことを、教授会に対して詫びられた時のことでした。ご自分の指導の不備をご説明され、これは「わたくしのまちがい」でした、ときっぱり言い放たれた時の潔さと気品に圧倒されたことは今でも強烈に心に刻まれています。人間は間違いを犯したり何かに敗北した時にこそ、その品格が最も現れるものだと思います。

優子先生と一緒に仕事をすることは多くはありませんでしたが、現在視野形成科目に位置付けられている「社会を変えるための実践論」の立ち上げにご尽力くださったことはとても楽しい思い出になっています。たまたま10年余り前に自分の生活圏で社会運動や裁判に巻き込まれ闘った荒井容子先生や私、そして学生の社会意識をもっと育てていきたいと思う教員10名程度で、今までとは少し違った授業を立ち上げようということになりました。知識を得るだけでなく、「行動する知性」を育てるためにはどんな授業にすればよいのか、教授会の後集まってさまざま議論しました。科目名は「社会を変えるための実践論」がよいとご提案されたのは優子先生です。そして授業では百姓一揆の作法を社会運動として論評されたり、自らその時代に身を置いておられた全共闘運

動を1.5人称で語っていただきました。社会と優子先生のつながりの原点がストレートに学生に伝わったように思いました。まもなく総長になられて、授業で一緒にすることができなくなりましたが、教科書『そろそろ「社会運動」の話しよう』に原稿や対談を寄せてくださり、その後もこの授業を支えていただきました。

つい最近、日本学術会議が新会員として推薦した105名の研究者のうち6名が、内閣総理大臣により任命されなかったことが明らかになりました。田中優子総長は2020年10月5日「日本学術会議会員任命拒否に関して」というコメントを法政大学のホームページに発表されました。マスコミ報道が出てから最も早く反応された大学人ではなかったかと思います。大学を背負うお立場での勇気ある行動は、全国の研究者・知識人の心を奮い立たせたに違いありません。まさに「社会を変えるための実践」であり、優子先生の潔さを再び眩しく感じた瞬間でした。

法政大学を去られた後も、その「行動する知性」で日本社会に大きく貢献されることを期待しております。